死刑確定囚が１００人に

厳罰化の果ては？

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

２月20日に死刑判決が確定した人が１００人になったことが報じられました。その約半数は東京拘置所に拘禁されている人たちです。

先日、元裁判官の方が「無罪だと思いつつも多数意見が有罪だったので死刑判決を書いたことが悔まれてならない」と証言され話題になった袴田巌さんもその一人です。

★☆★

昨年12月25日、クリスマスの日を選んで長勢法務大臣が４名もの死刑を執行した背景には、このままでは死刑確定囚が１００人になってしまうという事情もあったと伝えられます。にもかかわらず、こんなにすぐに１００人に達してしまいました。死刑の執行は死刑囚を減らさず、むしろ増加させてしまうかのようです。

★☆★

日本では、死刑確定囚だけではなく、無期懲役囚の数もどんどん増えています。無期懲役の判決が増えた上に仮釈放がほとんど認められなくなっており、事実上、終身刑と化しているからです。２００５年の統計では年間１３４人の無期懲役判決が確定し、同年の仮釈放はわずか３人（全員が20年以上服役した上でのことです）でした。１９９９年に１０００人を越えた無期懲役囚は現在１５００人前後になっているものと推定されます。

★☆★

それは「凶悪犯罪」が増えたからではありません。それは統計的にも明らかです。以前であれば、死刑を適用することは控えられた事件が躊躇なく死刑にされ、有期刑が相当だった事件に対して無期懲役判決が出されているのです。

★☆★

こうした重罰化は、世論が求めているかのように喧伝されています。「世論」とは皆さんや私たちの意見のことです。しかし、そのほとんどは、テレビをはじめとするマスコミによって得た情報によって作られ、またその報道が「世論」そのものであるかのように扱われています。

そんな中で、「死刑が当り前」といった感覚が増長されていることを懸念します。

重罰化の果てには、毎年、何十人もの死刑執行をしながら、犯罪が抑制されたわけでもなく、戦争に突っ走ったアメリカの姿が重なります。そのアメリカでも戦争、そして死刑乱発への見直しの声は高まっているようです。

★☆★

すでに「死刑廃止が当り前」の感覚となっているヨーロッパ社会の雰囲気を二月にパリで開催された死刑廃止世界大会に参加した人が伝えてくれました。「死刑は無条件に廃止しなくてはならない。死刑は効果的かどうかという議論は拒否すべきである。拷問は効果的かどうかという議論をするだろうか？」という発言があったそうです。

「死刑が当り前」と言ってしまう前に、ちょっと考えてみませんか。